

津ライスニュース 令和4年産 第2報

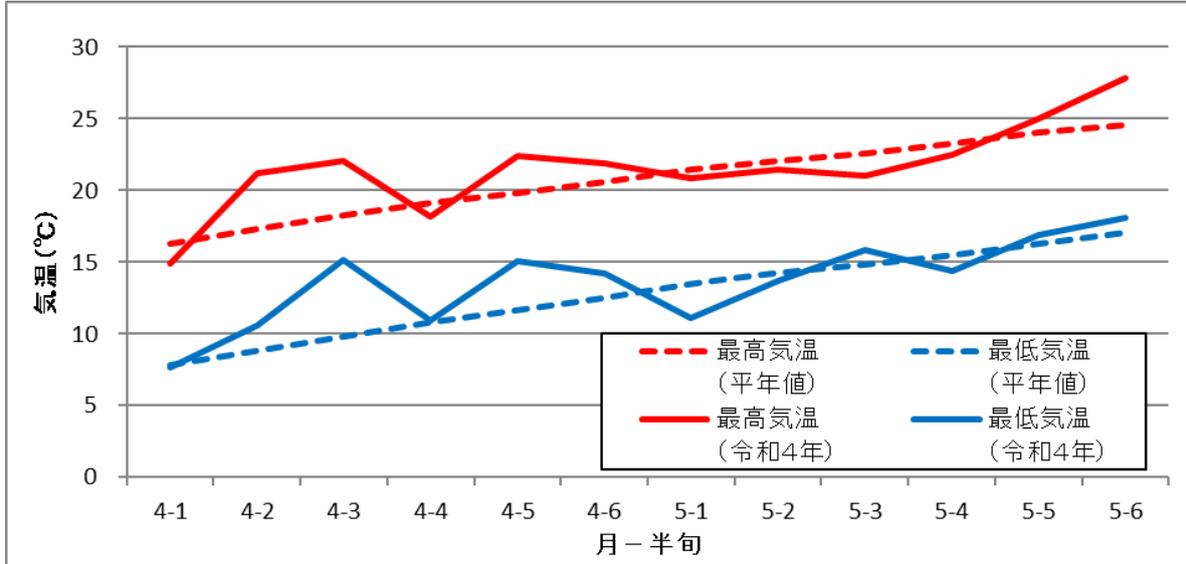
令和4年6月7日

津地域農業改良普及センター 電話:059-223-5103

気象経過

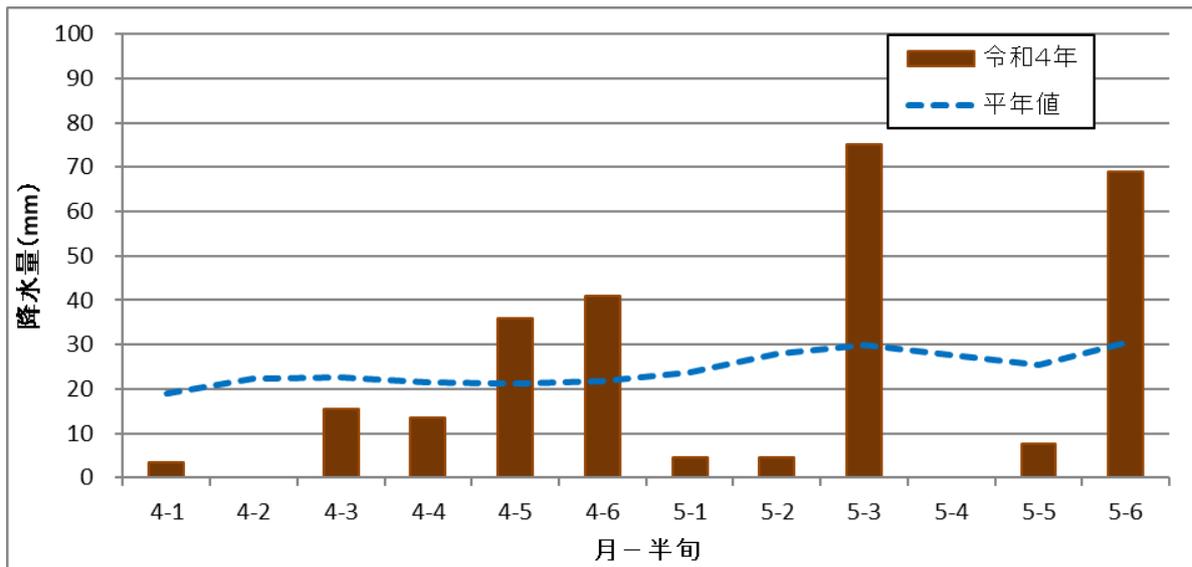
<気温>

4月第5半旬までは気温が高く経過しましたが、5月第1半旬から第5半旬にかけては、気温が低く経過しました。



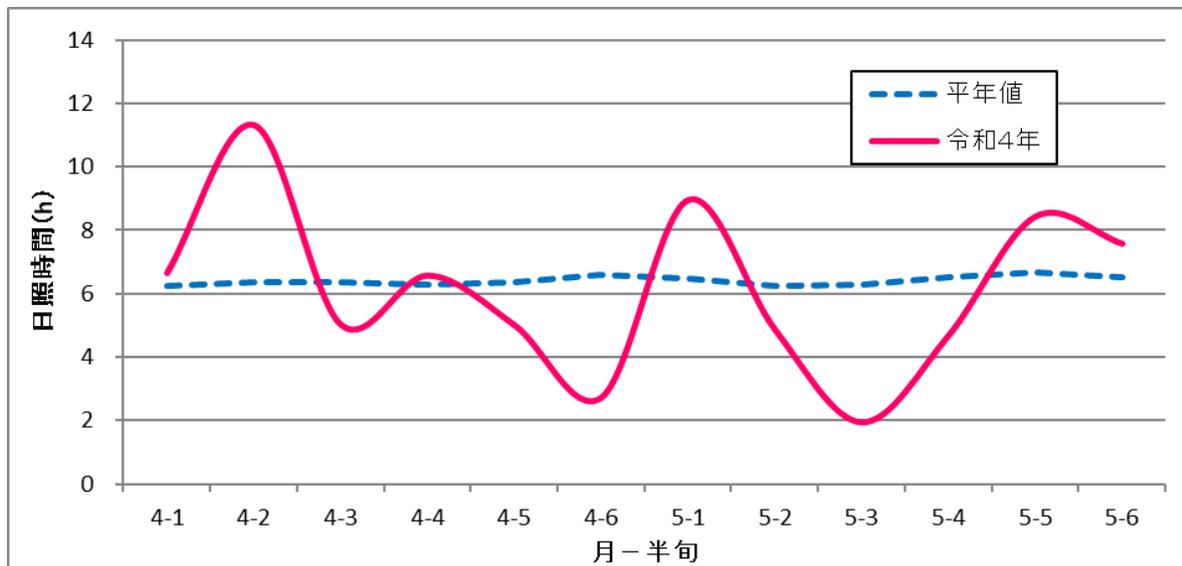
<降水量>

4月下旬に3日程度まとまった雨が降りました。5月上旬は雨が少なく経過し、5月中旬以降は、まとまった雨が降る日が5日程度ありましたが、降水量は平年より少なめで経過しています。



<日照時間>

4月下旬は降雨の影響により日照時間が少なく推移しました。5月第1～第2四半旬は日照時間が長く経過しましたが、降雨の影響により5月第3～第4四半旬は、日照時間が少なくなりました。



生育の概況

4月下旬に風の強い日があり、植え傷みしたところがありました。また、5月第1半旬から気温が低く、5月上旬に田植えをしたところを中心に活着がやや遅れました。その後、日照時間が少なく、気温が低めで経過したなどの影響により、稲の生育は、葉伸び傾向で茎数が少ない状況となっています。農業研究所(嬉野)の作況田でも、平年に比べ茎数は少なくなっています。

令和4年産水稻生育基準田 調査データ

R04年産水稻

R04.6.1時点

調査場所	移植日	草丈 cm	茎数 本/m ²	葉色 SPAD	葉齢 L	移植後日数
殿村	4月10日	36.6	421.0	41.5	7.5	52
安濃	4月27日	33.8	282.7	40.6	6.0	35
白山	4月25日	28.1	218.8	38.7	5.6	37

(参考)令和3年産水稻生育基準田 調査データ

R03年産水稻

R03.6.1時点

調査場所	移植日	草丈 cm	茎数 本/m ²	葉色 SPAD	葉齢 L	移植後日数
殿村	4月15日	32.8	252.0	38.2	7.6	47
安濃	4月25日	35.5	205.9	36.7	6.6	37
白山	4月27日	31.6	187.5	37.5	6.2	35

○農業研究所(嬉野)の作況試験田のデータ

【調査時期: 移植+30日後(5月25日)】

品種	年度	移植日 (月.日)	草丈 (cm)	茎数 (本/m ²)	葉齢 (L)	葉色 (SPAD)
コシヒカリ	R4	4月25日	30.0	249.6	6.5	43.5
	平年値(H24~R3)		29.1	334.7	6.9	38.4
三重23号	R4	4月25日	30.8	249.7	7.0	42.3
	平年値(H24~R3)		31.6	346.8	7.4	42.1

病害虫の発生状況と対策

<いもち病>

いもち病発生に適温(25~28℃)となる時期を迎えています。本年は、水稻が軟弱徒長気味の生育であることに加え、今後も平年と同様に7月半ば頃まで曇りや雨の日が続くと予想されており、本田でのいもち病発生が懸念されます。

梅雨入り後、いもち病発生の好適条件が揃うことが予想されますので、ほ場を見回り、いもち病の初発の早期発見と適期防除に努めましょう。感染源(補植用の置き苗など)を減らすことも対策の一つです。

いもち病発生の好適条件は、三重県病害虫防除所の「発生予測支援システム(ブラスタム)」を参考としてください。

いもち病発生予測支援システム(ブラスタム)

【<https://www.pref.mie.lg.jp/byogai/hp/39584007416.htm>】

または「三重県 ブラスタム」で検索を。

<斑点米カメムシ類等>

昨年度のカメムシ類の発生が多かった影響により、本年は越冬個体が多いことが予想されます。今後、畦畔等、ほ場周辺での発生増加に注意しましょう。

- ・カメムシ類の増殖場所となるような畦畔雑草を早めに除去しましょう。
- ・草刈りは出穂10日前までに行いましょう(出穂直前や出穂後の草刈りは、水田への害虫侵入を助長します)。

今後の栽培管理

<水管理>

- ・中干しまでは、できるだけ浅水管理(2~3cm)にして日中の水温確保に努め、分けつのは発生を促しましょう。
- ・本年は茎数が十分確保できていないところが多く、生育状況を見ながら中干しの開始時期を調整しましょう。(中干し開始は株当たり茎数が約20本となった頃が目安)
- ・中干しは土壌中に酸素を入れることによって、根の活力を高めるとともに稲の株元を強くして倒伏しにくくする効果や、土を硬くして収穫時の作業性を高めるなどの効果があります。適切な中干しの励行によって稲の生育を最適に保ちましょう。
- ・中干しは、土壌表面に小さい亀裂が入れば終了です。強い中干しは、かえって根を傷めることになるので、注意しましょう。
- ・中干し後は、こまめな間断かん水を行い、土壌に適度な水分と酸素を供給し、根の健全化に努めましょう。(長期間水を溜めておくと、酸素が不足することによって、根の老化や根腐れによる下葉の枯れ上がりが進みます。)

<登熟向上資材の施用>

近年、気候変動による猛暑などで水稻の収量や品質が低下しています。安定生産のためには土づくりが重要であり、特にケイ酸分の補給が必要です。作付けまでにケイ酸を施用していないほ場では、水稻生育期間中での施用をお勧めします。

(資材例) けい酸加里 30~40kg/10a (時期)田植え後40日頃

また、猛暑が予想される場合、白未熟粒対策として、出穂期に耐暑肥(窒素成分1kg/10a程度)の施用も有効となります。